平成27年3月1日（日）東奥日報（21面）

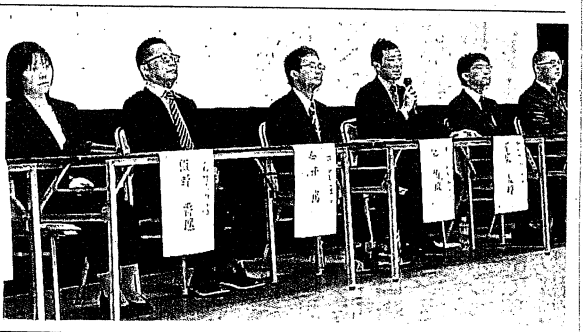
動脈硬化、物忘れに関連性

岩木健康増進プロジェクト　弘前医師が結果報告

平均寿命アップを目指し、弘前大学などが弘前市岩木地区の住民を対象に2005年度から行っている「岩木健康増進プロジェクト」の結果報告会が28日、同市の岩木文化センター「あそべーる」で開かれ、住民ら約120人が動脈硬化と認知機能の関係などに耳を傾けた。

弘大大学院医学研究科の医師7人が報告。社会医学講座の高橋一平准教授は、住民の認知機能を数値化した結果を基に「動脈硬化がある人は、ない人に比べて物忘れのリスクが約3倍高い」と説明。運動する子どもの骨密度は、しない子どもよりも約10％高いことなどを報告した。

循環器腎臓内科学講座の富田泰史講師は、本年度から実施した心臓超音波検査の結果を説明。大動脈弁の石灰化が進み弁が硬くなっている人の割合は軽度が20％、重度は13％だったとし、「健康な人を対象に千人規模で同検査をするのは恐らく国内で初めて。弁の石灰化が病気に分類されるかどうかは定まっていないが、老化の始まりか、弁膜症に進行すると推定される」と話し、継続的な調査の必要性を指摘した。



弘大大学院医学研究科の医師がプロジェクトの結果を説明した報告会

同研究科の中路重之科長は「プロジェクトは全国から注目されるようになっており、日本人の健康に役立つよう成果を出したい」と語った。

本年度のプロジェクトには住民約1200人が参加した。得られた健康データを脳疾患の予防につなげる産官学の共同研究事業は13年、国の「革新的イノベーション創出プログラム（COI STREAM）」に採択された。

（佐藤彩乃）